

Title	社会心理学の問題：その史的概観
Sub Title	
Author	佐原, 六郎(Sahara, Rokuro)
Publisher	三田哲学会
Publication year	1939
Jtitle	哲学 No.20 (1939. 4) ,p.41- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000020-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社會心理學の問題

—その史的概観—

佐原 六郎

- 一、社會心理學前史
- 二、初期の民族心理學
- 三、ウントの民族心理學
- 四、差異的民族心理學
- 五、群衆心理學
- 六、集合心理學
- 七、タルド及びロツスの社會心理學
- 八、本能論的社會心理學
- 九、人格形成論的社會心理學
- 十、行動論的社會心理學
- 十一、結語

—

久しく他の諸姉妹科學に寄生して居た社會心理學が、社會學、殊に心理學的社會學の中に於ける最も安逸なる隱家を離れて、漸く独自の領域を開拓し始めたのは

極めて最近のことである。従て今日の社會心理學が主として取扱つて居る問題の大部分はこれまで既に他の諸科學に於て論及されたものと見て差支ない。もし更にそれ等の問題が、斷片的にでも言及された實例を歴史的に遡つて求めて行くなれば結局他の姉妹科學の場合に於けると同様希臘哲學の古き時代にまで達するのであらう。例へばその最も古き言及は紀元前第五世紀頃のソフィスト達の思想を傳へた文獻の中にさへ發見される。一般に、いつの時代に於ても相對主義者が實際問題に移ると、彼等は他律的態度に出で、法律習俗傳習その他の外的權威の承認に甘じ易いものとされて居るが、相對主義者にして然も實際家であつたソフィスト達の取つた態度こそはその最初の實例と見るべきものであつたらしい。(波多野精一著、西洋宗教思想史、希臘の卷、第一、二五九頁参照)これを他の半面から見ると、一般現實の社會生活に於て、法律習俗傳承その他の外的權威はその社會の各成員の思想及び生活様式を制約する有力なる要因と見做されるのであつて、ソフィスト達はかゝる事實を明確に認識した最初の人々であつたらうと思はれて居るのである。彼等に於ては既に個人に及ばず心理的社會環境の影響が問題とされたのであつて、現代社會心

理學者の先輩たるG・タルドや、E・A・ロッスの所説を聯想せしめるものがある。

同じく希臘に於ける他の一例をアリストテレスに取つて見やう。「國家が本然的に存するもの、一つであり、且つ人間が本然的に政治的動物である事は明白であつて、單に偶然的にはなく、本然的に國家を持たない者は劣等人であるか超人であるかの何れかである。」又「萬人には本然的に斯る共同生活への衝動が存する」(青木巖譯アリストテレー)と云ふ言葉は後世の社會科學の文獻に於て廣く反覆引用されて居る餘りにも有名な文句であり、就中社會の理性論的説明たる社會契約説を否定して人間の社會的本能の存在を強調し、之を以て社會成立の要因と見做した本能論的社會心理學者にとつては金科玉條となつて居る。

斯くの如く社會心理學上の問題の取扱はれた事例を歴史的に調べて行くならば近世社會科學關係の文獻に於ては勿論、古代及び中世の古典中にも隨處に發見せられるのであつて、もしそれらの事例を丹念に集め、一定の方針に従つて分類組織するならば極めて興味深き社會心理學前史が編まれるであらう。

二

第十九世紀に於て社會心理學的科學の必要と可能性とを認めた最初の學者として、J. F. ヘルバルト（一八四一—一八七六）が擧げられて居る。當時一般には人間の人格が生得的、先天的性能によつて決せられるものだ、と云ふ説が行はれて居たのであつたが、ヘルバルトはその著「心理學教科書」（一八一六）及び「科學としての心理學」（一八二五）に於て人間の精神生活が大體に於て後天的經驗の所産なる事を主張し、從て圓熟せる心理學は社會的存在としての人間を研究しなければならぬと考へた。その後社會心理學に近似せる學問としては、J. S. ミル（一八七三—一八八〇）の「人性學 (Ethology) や C. カッターネオ（一八六九—一八八〇）の「結合せる心の心理學」(Psychology of associated minds) の如き比較的、に早き現れもないではないが、特に注意すべきは獨逸に於ける民族心理學の勃興である。

民族心理學なる名稱は一八五一年に「民族心理學の概念及び可能性に就いて」と題する小冊子を發表した M. ラッアルス（一八二四—一九〇三）によつて始めて使用され、更に

彼がその従兄にして且つ言語學者たりしH.シユタインタール（一八八二—一九三〇年）と共同して一八六〇年に創刊せる「民族心理學及び言語學雜誌」に依つて普及されたものである。彼等はヘルバルトの影響を受け、民族精神と雖も結局は民族集團を合成して居る個々の成員の中にのみ存するのであると考へ、従て民族心理學も亦一面に於ては個人心理學に於けると同様の一般法則に準據すべきものと爲した。而して彼等がかゝる學問を、社會心理學と名付けず、特に民族心理學と呼んだのは、現實の人間を以て單に空名的な社會一般の生活を爲すものではなく必ず一定の民族に所屬し、民族的生活を爲すものと考へたからであつた。然らば彼等の所謂民族心理學とは如何なるものであつたらうか。先づラツアルスによれば民族心理學は精神的民族生活の要素及び法則の學問であつて、第一に民族精神の本質及び諸要素を究め、次いで民族精神の諸活動としての神話、宗教、祭祀、儀式、俗話、文字、藝術、經濟、習俗、道德、法律等が民族精神全體の中に於て相互に作用し影響し合ふ所の全般的狀態を説明し、更に民族精神そのもの、發達及び衰亡を辿るべきものである。（米田庄太郎著「民族心理學講話」四、五頁參照）斯くて彼は民族心理學全體を、民族精神發達の一般法則を

研究する民族精神一般論と、各民族の精神的特性を明かにせんとする心理學的人種學との二部門に分けた。

次にシュタインタールは、民族心理學と他の心理學との區別を明確にするため一八八七年の上述雜誌第十七號に於て次の如き分類を試みた。

一、一般心理學、觀念、感情及び衝動の機制に關する科學

二、民族心理學、共同的精神生活の科學

A、綜合的的民族心理學、共同的精神生活の一般的基礎の研究

B、特殊的民族心理學、Aの基礎的原理の人種學、先史及び歴史そのものへの

應用

三、個人心理學、個人精神の科學

此の分類に於て、一と二のAとは共に獨立の理論的構造を持つもの、又二のBは單に補助的のもの、而して三は單なる個人精神の歴史であつてそれが綜合的のもの

のであれば一又は二の中に含められ、應用的のものであれば傳記となる、と考へられて居る。斯くてシュタインタールの民族心理學は社會及び歴史の研究によつて發見された諸事實を心理學的原理に基いて説明せんとするものであつた。研究の資料は人類學歴史その他の方面から受ける事もあらうが、目的は第一に民族精神そのものを明かにし、それが民族の發達に及ぼす影響を記述し、第二に夫々の特殊の人種又は民族の心理を究める事にあつた。

ラツアルス及びシュタインタールが社會學や人類學から獨立せる民族心理學の樹立を企て、且つ独自の學問的名稱を使用した事は所謂社會心理學が當時及びその後久しく、主として社會學の中に埋没して居た事に對照して興味ある點である。けれどもその名目上の獨立も決して永くは續かなかつた。何故ならば民族心理學は、總て一層包括的なる社會心理學の中に包攝せられ、僅に社會心理學の初期の一形態又は主として原始民族の心理的研究を擔當する一部門として觀念せられるの運命を持つて居たからである。

ラツアルス等の民族心理學に於て問題とされた民族精神及びその本質に關す

る考察は後世の社會心理學の一派、例へばマクドウガルの集團精神や國民精神の研究の先驅を爲したものと云へやう。然らば彼等は民族及び民族精神を如何なる意味に解したであらうか。ラツアルスは、雜誌第一卷に於て、民族決定の純主觀的標準を立てた。即ち「民族とは互に同一民族に所屬するものと認め合ふて居る人々の一全體である」と。此れは一種の循環定義に陥つて居るが、それは別問題としてこの概念に於ては、人種學上の體形及び體質的の特徴の共有とか、同一言語の使用とかの如き從來多くの學者に依つて立てられて居た客觀的標準が無視されて、後世GFギディングスによつて唱へられた同類意識の如き、主觀的標準のみが採用されて居る。これはラツアルスが純粹人種や純粹言語を以て、もし在るとするも、甚だ少いと考へたがためであつた。民族を斯くの如く純精神的存在と見做したラツアルスは更に、人種的に結ばれた人々の持つ生得的類似性、同じ環境より與へられる幾多の共通經驗、又此等の經驗やその他、人々が同様に重大視せる種々の事件に基いて成る多くの傳統等から所謂民族精神(Volkgeist)が生ずるのだと考へた。而して此の民族精神は民族を統一する紐帶であり、原理であり、觀念であつ

て、民族成員の精神生活は、内容的にも形式的にも、これによつて制約されるものと見られて居る。ラツアルスは又民族精神と環境との相互關係を強調し、民族精神は決して自然の所産ではないが、然も自然の協力無くしては現に在るが如き性質のものとはならない」と述べ、外界の事情が民族精神の發達に及ぼす影響を認めたとのである。尙ほラツアルス等は個人と社會との關係の問題にも觸れて、一全體としての民族は決して單なる個々の人々の總和ではなく、それ自體一つの完全なる有機的統一體であると見做した。即ち此の中には單なる個人ではなく全體の一部分としての個人にのみ適用するやうな法則及び過程が行はれ、全體作用の主體は常に全體であつて、個々の成員の行動は、その目的に於ても内容に於ても、全體によつて決定せられ、從て全體が個々の人々より成立すると云ふよりは、逆に個人は全體の中に於てのみ完成すると考へられたのである。

右の如きラツアルス等の民族心理學について第一に氣附かれる疑問は民族に關する心理的概念の空漠性である。同一の集團に所屬して居ると云ふ意識は、決して民族の場合にのみ存在するのではなく、他の如何なる種類の社會にも存し得

るわけである。然も民族内に於ける此同類意識が他の諸社會に於ける同様の意識と如何に異なるか、即ち民族をして民族たらしめる獨特の心理的特徴が何であるかは究められて居ない。この民族概念の空漠性から彼等の所謂民族精神の曖昧性も生じて來るのである。勿論彼等の民族心理學の中にも、後世の學者にとつて、暗示に富む幾多の論述が行はれて居る。けれども彼等が當時の社會學や心理學に與へた直接的影響は決して大きなものではなかつた。その理由としては、M. M. デーヴィスの云ふ如く、彼等の研究が比較的に普及性の乏しい雑誌に於てのみ發表された事の外に、更に當時生物學又は物理學の社會學及び心理學に與へた刺戟が頗る大きく、従てそのために生じた自然科學的傾向に對して、民族心理學の取扱へる抽象的にして空漠なる民族精神の論議は甚だ縁遠く感せられたらう事も擧げられる。

(1) Vid. Fay B. Karpf, *American Social Psychology*, 1932, pp. 44—45.

(2) See Steinthal's classification of *Psychology as a whole* in M. M. Davis's *Psychological Interpretations of Society*, 1909, p. 29.

(3) (4) (5) From the opening article of the "Zeitschrift für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft,"

1860. Davis, op. cit. p. 30.

(6) Davis, op. cit., p. 30.

三

ラツアルス及びシュタインタールの民族心理學は上述の如くその内容を二つの部門に分けて居たが、彼等によつて民族精神一般論、又は綜合的民族心理學と稱せられた方面をのみとり、そこに民族心理學の本流を認め、特殊民族心理學、即ち各民族に就いて、夫々の民族精神の差別相を比較説明せんとする方面を民族心理學の領域から排除して、之を人種學又は民族性格學に歸せしめんとしたのはW・ヴント(一八三〇—一九〇〇年)であつた。彼は、その大著民族心理學の第一卷上(一九〇〇年)の開卷第一頁に於て、先づ民族心理學が「人類共同社會の一般的發達と、普遍的價值を有する共同の精神的所産の成立との根柢に存する心理的過程を研究する事」を以て任務とする由を主張した。然らばかゝる普遍的價值ある共同の精神的所産、即ち民

族心理學的現象を彼は如何にして他の心理現象から區別したであらうか。これについてヴントは次の二つの標識を擧げた。即ち第一^②は、その起原を一定の個人に歸せしめる事が出來ず、共同社會内の不定數の成員達の共同活動にのみ歸せしめられるが如き現象を以て所謂共同の精神的所産と爲す。換言すれば、人間生活の共同態に依て生せしめられ、從て多數の人々の相互作用を豫想して居るが故に、單なる個人意識のみを條件としては到底説明し得ざるが如き精神的所産を以て民族心理學的現象と見做したのである。又第二に、かゝる共同所産は歴史的に色々の事情の下に發生するのであるから、發達の上から見て多種多様であらうけれども、然^④もかゝる多様性にも拘らず、そこには若干の普遍妥當なる發展の法則が辿られる「點」に於て他の現象から識別される。ヴントの民族心理學は實に此の二つの標識によつて共同の精神的所産と考へられたものゝ法則を明かにし、以て精神發達の一般を研究せんとする學問なのであつた。

ヴントは、周知の如く、科學としての心理學を樹立するため、精神に關する從來の一切の形而上學的概念を排し、精神を以て個人の心的經驗の全内容を意味する

ものと爲し、直接經驗の學としての心理學を提唱した。而して此の意味での心理學は個人心理學と民族心理學との二つの部門に分たれる。前者は個人の直接經驗を、實驗的基礎によつて、觀察分析し、そこに發見された心的要素を抽出し、此等要素の複合の法則を明かにし、以て一切の個人的精神現象を説明せんとする構成心理學である。然るに彼は、かゝる個人的精神現象の外に、遙に高等複雑にして到底實驗的手段によつては容易に明かにし得ざる精神現象を言語、習俗、宗教、神話、藝術、法律、社會等の文化の中に認め、それが如何にして生じ、如何にして發達するかを究める必要を感じ、こゝに精神發達の一般法則の學としての民族心理學を樹立したのである。而して彼は民族心理學こそは眞の意味の發達心理學であると考へた。

ヴントは右の如く心理學を二つの部門に分ち、個人心理學に於ては現代心理學への發展の牢固たる基礎を築き、又民族心理學に於ては、實に心理學的人類文化史とでも稱し得べき、驚くべき廣範なる研究を遂げたのであるが、然も後者は、前者の如き、それ自體としての發展の基礎とはならず、寧ろ名實とも社會學及び社會心理學へ合流せざるを得なくなつたのである。然らば何故ヴントは上述心理學の第

二の部門を、ラツアルス等の用ひし名稱を踏襲して、民族心理學と名付けたのであらうか。彼の定義によれば民族とは、血縁に基く出自、祖先、言語、禮拜、宗教、習俗、法律生活等の歴史及び文化の共通性の基礎の上に連繫して保たれ、協同體意識により荷はれる人間の社會結合集團（平野義太郎譯、民族心理學より見たる政治社會）である。然るに彼が民族心理學に於て取扱つた問題は、彼自身も認める如く、以上の意味に於ての民族の精神現象のみならず、家族、部族等をはじめ他の種々の形體の共同社會體の精神現象にも及んで居る。そのため民族心理學と云ふ限定された名稱よりは寧ろ廣く人類心理學（Menschheitspsychologie）と呼んだ方が適當ではないか、と云ふ説も起り得るものと考へられた。これに對してヴァントは次の如き辯明を爲した。即ち彼は自己の企圖せる研究が空漠なるものとならぬためにも、人類社會の中、最も重要にして代表的なる民族に着目し、その概念を選んで此の科學の名稱に當てる事は少しも差支ないと。又共同社會心理學（Gemeinschaftspsychologie）なる名稱を採用するとせば、それは主として、民族共同體（Volksgemeinschaft）以外の、別個の共同社會を取扱ふが如き誤解を生せしめ易い。更に社會心理學（Sozialpsychologie）なる語は

一般に、その心理學的方面に於てさへ、近代的文化生活の問題をのみ扱つて居る所の社會學を連想せしめる。然るに精神生活の全體的發展の説明と云ふ點から見るならば、家族、階級、氏族、集團等の他の諸社會をも疎外せず、寧ろそれらを包攝して居る民族なる概念を選んで民族心理學なる名稱を用ひるのは誠に至當な事である。

ヴントが右の如く考へて特に民族心理學と云ふ學名を尊重したのも、少くとも十九世紀の末頃より二十世紀初頭にかけては、無理ではなかつた。何故ならば彼の云ふやうに社會心理學はその頃全く社會學と混同せられて居たし、又ラツアルス等の創唱した民族心理學と云ふ名は特に獨逸に於て親しみ深きものとなつて居たからである。けれどもその當時とは全く事情が變り、更に、社會學から獨立した社會心理學の日に増し隆盛となりつゝある今日に於ては、最早民族心理學なる名稱の下に、ラツアルス、シュタインタール、ヴント等の取扱つた諸問題を論ずる事は時代遅れとなり、却つて社會心理學の中で之を取扱ふことが自然であるやうに感せられるに至つて居る。これは單に名稱の事であるが、内容の方面から見ても

グントが、タルド以來社會心理學の重要なる問題となれる個人心理の相互關係又は相互作用に就いての十分なる研究を行はずして、然もそこからのみ生ずると考へられる現實的にして超個人的なる民族精神と、その表現としての言語、神話、習俗の説明に飛躍した事は甚だ物足りなく思はれる。

- (1) W. Wundt, *Völkerpsychologie*, Bd. I. Die Sprache, Teil I, 2 Aufl., 1904, S. I.
- (2) Vgl. a. a. O., S. 4.
- (3) W. Wundt, *Elemente der Völkerpsychologie*, 2 Aufl., 1913, S. 3.
- (4) *Völkerpsychologie*, I. I., S. 4.
- (5) *Elemente*, S. 4.
- (6) a. a. O., S. 4—5.

四

民族精神の一般的法則を求めんとするグント流の民族心理學に對して、人種、民族、國民等に於ける集團的精神、又は集團的性格、の變異の類型を明かにせんとする差異的民族心理學又は民族性心理學は、既にラツアルスの所謂人種心理學、或は又

シュダイインタールの所謂特殊民族心理學、更に又ヴントの所謂民族性格學等として別個の取扱ひを受くべき性質を持つて居た。而してドイツに發達した民族心理學は主として綜合的民族心理學に重點を置いたものであつたが、之に反してフランスに於ては主として差異的民族心理學が展開され、シャルル・ルトウルノー（一八三〇—一八六〇年）、E・G・ブートミー（一八三五年—一八六〇年）、A・フイエ（一八三八年—一八八二年）、G・ル・ボン（一八三二年—一八八四年）等の研究は此の方面の代表的のものであつた。

その中先づルトウルノーの⁽¹⁾人種心理學（一九〇一年）は諸人種又は諸民族の心理的特徴の研究であつて、彼等の知力的、道德的發達の程度を測定し、以て彼等の心理的、精神的價值を見定め、而してその價值の大小或は上下に従うて彼等を一定の順序に分類し、配置する事によつて、人類全體に於ける心理的、精神的進化を明かにする⁽²⁾（米田庄太郎著）事を以て任務としたものであつた。

次にフイエの此の方面に關する著書としては、佛蘭西民族の心理⁽³⁾（一八九八年）と、歐洲各民族の心理草案（一九〇二年）とがある。彼は、後者に於て、民族心理學を以て、ルトウルノーと同様、各民族の精神的特徴を研究する學問なりと考へ、民族決定に

嘗つてはラッアルスの用ひし主觀的標準のみに依るべきではなく、人種氣候、自然環境等の靜的要因と、民族の歴史、隣國との關係、知力、藝術、道德等の發現の如き動的要因とを考慮に入れなければならぬと爲した。他方又彼は各民族の中に人種的遺傳及びそれに伴ふ心理的傾向に基く先天的特徴と、社會環境及びそれに伴ふ心理的傾向に基く後天的特徴との融合して居る事を認め、結局民族精神は此等の人種的、環境的、及び心理的の諸要素の綜合より成るものと説明した。彼は又ドイツ語の *Naturvölker* とは單に靜的要因に基く先天的特徴をのみ持つ人々に相當する概念であつて、かゝる民族は野蠻人の間に於てさへ存在せず、現實の民族は何れも多少とも動的要因による後天的特徴を混有するものであると考へた。斯くて彼はこゝに一種の法則を認め、文明の發達せる所では、「民族精神の構成に於ける心理的並びに社會的の動的要因が益々優勢となる」と論じた（以上大日本文明協會譯、歐洲各國民の心性、上卷、原序及び第二章參照）。

右の如く諸民族の心理的特徴を捕へるに際し靜的要因と動的要因とを分ち、その中特に動的要因を重じた外に、更にフイエは次の如き點に注意を喚起した。即

ち「民族」の性格は必ずしも民族中の大衆や庶民、或は又事實上の絶對多數者によつて最もよく表現されるのではない。民族の中には、自然的優者 (elite) が現はれて、それが一切の人々にも増して、全民族の精神、根本觀念、又は最も本質的な傾向を代表する事がある」と。この事は彼が特に世の政治家達に向つて爲した注意であつたが、後述する如きロツスの所謂「心的相互作用に於ける個人優越」の問題に照し合せて頗る興味深く思はれる。

フイエは以上述べし如き二つの社會心理學的著述をなし、一方では自分の所屬する佛蘭西民族に就いて、又他方では、古代及び近代の希臘人と伊太利人とをはじめ、歐洲の主なる民族に就いて、夫々の心理的特性を概括的に説明したのであつたが、然し彼は此の種の差別的民族心理學を以て獨立の科學と見做したわけではなかつた。彼は「主」として社會學的見地より諸民族の性質を研究するのが民族心理學の任務である」と爲し、更にその社會學的見地とは人々相互の作用と反作用とに依て個人及び社會全體の中に形成せられる特徴に注目する立場であると考へ、然も此の種の相互作用及び因果關係こそは社會學そのものの本質的對象を爲すも

のだと云つて居る(大日本文明協會 譯同上十九頁)。かくてフイエの民族心理學は結局一種の社會學と見做されて居たと考へられる。

フイエが民族精神成立の動的要因及び後天的影響に注意を向けて所謂社會學的決定說(大日本文明協會 譯同上二十頁)を唱へたのに對し、その靜的的要因及び先天的傾向を重視し、民族精神又は民族的性格の恆常性及び不可變性を強調したのはブートミーとル・ボンとであつた。ブートミーはその著「第十九世紀英國國民の政治心理論」(一九〇一年)の結論に於て次の如く述べた。「余の捕へんと努力したのはイギリス國民性格の根本的基礎、即ち有ゆる時代を通じ、且つ民主、少數獨裁、君主、共和、の諸政治形態や、自由貿易主義、保護關稅主義等の諸變化を通じて、常に變らずに持續せる部分であつた」と。斯くて彼は英國人の個人主義、非同情性、傲慢、非連帶性、分析的ではあるが綜合的にあらざる事、その他の特徴を擧げて、かゝる性格は、歴史上の各時代に生じた種々の變化にも拘らず、依然として存續し、此の國の政治、經濟、社會の有ゆる活動に影響を與へ、その上此の國の歴史の方向をも決定して居るものであると主張した。彼は又「アメリカ國民の政治心理學要綱」(一九〇二年)に於て、J.ブライスの名

著「アメリカン・コムモンウエルス」の研究方に言及し、「もし自分がブライスの如き豊富なる智識を持つて居たならば、ブライスの研究法を逆轉して、先づ個人としての人間を以て論述をはじめ、次いでアメリカ住民の民族的及び人種的根原と、彼等が移住に依て示した種々の心的類型とを明かにし、それから新大陸に於ける物理的並びに自然的環境を、その地理的状況と歐洲大陸からの離別と云ふ事情とを考慮に入れつゝ、研究したであらう」と云ふやうな意味の事を述べた。然も彼は、此方法によつてはじめて、合衆國を本質的には一個の經濟的社會たらしめ、副次的にのみ歴史的、政治的社會たらしめた所の移民と環境との相互作用が明かにされると言つた。

斯くの如くブートミーは一面に於て民族の人種的遺傳的特徴即ち先天的傾向を重視すると共に、他面に於て住地の自然環境たる靜的要因を究め、これによつて夫々米國民及び英民族の政治心理的現象を説明せんとしたのであつた。彼の此の演繹的方法は明かにその先輩にして且つ親友たりしH・テーヌ（一八八二—一八九三年）の影響を示すものであつた。テーヌは、その著「英文學史」（一八五七年）に於ても知られる

如く、一切の精神生活と歴史とを人種(人が生れ乍らにして持つ先天的遺傳的の素質より成る)環境、及び時代の三つの根源的力に歸せしめ、特に各民族にとり有ゆる時代を通じて殆ど變る事無き住地の自然的環境、即ちルトウルノ一の所謂靜的要因を重んじた點に於て、ブートミーと同様、民族精神の恆常性を研究せる一種の差異的民族心理學者であつたと云へやう。乍然自然環境の人間に及ぼす心理的影響の研究を果して民族心理學乃至社會心理學の問題となすべきか否かは頗る疑問であつて、寧ろそれはW・ヘルパツハの所謂精神地學現象(Die Geopsychischen Erscheinungen)として風土心理學(Geopsychologie)の問題となすべきであるかも知れない。

ル・ボン⁹は、後述の如く、群衆心理學者として特に著名となつたのであるが、彼は又差異的民族心理學の研究者でもあつた。今その著「民族進化の心理法則」(一八九五年)¹⁰(大日本文明協會譯民族心理及群衆心理の前半は此書の邦譯である)によつてその思想の一端を窺ふに、彼の民族心理學は結局民族精神(L'ame des races)を構成する心理的特徴を記述して、此等の特徴から各民族の歴史及び文明が如何にして發達して來たかを論證するものである。然らば彼の所謂民族精神とは如何なるものであらうか。彼¹¹に従へば、元來個人を

支配し、個人の行動を指導する影響には祖先の影響、直接の父母の影響及び環境の作用の三つがある。此の中第一の祖先の影響は最も重要な決定力を持つものであつて、これあるがために民族は、後天的に種々の變化を示すに拘らず、根本に於て恆常的性格を持續するのである。而して同一の國に屬する一切の住民が生れ乍らにして受け継ぐべく運命づけられて居る所の思想及び感情の總體がそのまゝ、民族精神となるのである。ル・ボン¹³は又民族と個人との關係を生物の個體と之を組織する細胞とに比較して、一民族に所屬する各個人は夫々短期的生命を以て死滅して行くが、然も同時に又悠久なる集合的生命、即ち民族の生命を擔ふ。各個人は既存の民族の中に生れ、その民族の存續に寄與しつゝ、終始之に従屬するものである。従て民族は超時間的永存的生物の如きものであり、それは相繼いで此の生物を保存せしめる個々の生きた人々より組織されるばかりではなく、既に死滅せる祖先の長き系統を以て成れるものである。

以上の如く論じたル・ボンは民族精神の恆常性を論證するため、更に次の如き分析的説明を爲した。即ち彼によれば、各民族には頭形や皮膚又は毛髮の色調等

の如き所謂解剖學的特徴の外に、更に心理的特徴がある。然も此の心理的特徴は、解剖學的特徴と同様に、各民族にとつて恆久不變のものである。勿論民族精神の心的組織の中には、祖先以來の恆常的なもの、外に、境遇、事變、教育、その他の要因によつて變化する可能性のある種々の附屬的特徴もあるが、それ等は遇然の一次的變化を示すに過ぎず、全體としての恆常的根本特徴を動かすものではないと。

この民族精神の恆常性又は不可變性の問題に關しては後の社會心理學者の間にも種々の議論があり、ブートミーやル・ボンの如く恆常性を強調する者もあるが、然し彼等と雖も決して民族精神の絶對的不變化を主張したのではない。寧ろもし變化があるとするも、それは、一時的の事變や境遇によつて直ちに現はれるのではなく、極めて長き時代に亙り殆ど氣のつかぬ程度に少しづつ現れるものなる事を暗に認容して居るものと解せられる。従て彼等の所謂恆常性は比較的又は相對的恆常性の意味に用ひられて居ると解すべきである。

ル・ボンは又各民族の心理的特徴に於ける知能的優劣の程度に基いて、民族間に四つの等級を區別した。即ち第一は原始民族 (les races primitives) であつて濠洲の

土人等を此の中に入れ、第二は劣等民族 (*les races inférieures*) で、ニーグロを以て代表せしめ、第三は中等民族 (*les races moyennes*) で、支那人、蒙古人等をこれに配し、第四に優等民族 (*les races supérieures*) として古代ギリシヤ人、現代ヨーロッパ人等を擧げて居る。勿論此の區分は極めて非科學的なものであり、彼に影響を與へたA・ド・ゴビノー(一八八一—一八八二年)の(17)人種不平等論(一八五三年)に立脚した粗雑な見解たるに過ぎない。此の四種の人種又は民族の中、低級なるものほど同族内に於ける智能の個人差が少く、從て比較的に平等であるが、高級なるものほど同族内の個人差は増大して、極めて卓拔せるものから、甚しく低劣にして所謂劣等民族の成員と區別し難き者に至るまでの著しき不平等が生ずるものと考へられて居る。(18)

以上はフランスの差異的民族心理學についてその一端を述べたまでであるが、此等の論述中にも示され、且つ今日の社會心理學にとつても宿題として残されて居る問題に次の如きものが擧げられる。民族精神又は國民精神の比較が如何にして可能であるか、又果して質的差異の外に量的差異があるか否か、更に又かゝる差異があるとしてそれを如何にして計測するか等。上述ルトウルノーその他の

初期の差異的民族心理學が、此等の問題に關する科學的檢討を缺いて居た爲、何れも不徹底な然も淺薄な記述に終つた事は當時としては寧ろ止むを得なかつた事であらう。

- (1) Ch. Letourneau, *La psychologie ethnique, Mentalité des races et des peuples*, 1901.
- (2) A. Fouillée, *Psychologie du peuple français*, 1898.
- (3) A. Fouillée, *Esquisse psychologique des peuples européens*, 1902.
- (4) Cf. W. Mc Dougall's *The Group Mind*, 1921, p. 139.
- (5) A. Fouillée, *La science sociale contemporaine*, 1883, p. xviii.
- (6) Émile Boutmy, *Essai d'une psychologie politique peuple anglais an xix siècle*, 1901.
The English People, A Study of their Political Psychology, tr. by E. English, 1904, p. 313 f.
- (7) É. Boutmy, *Éléments d'une psychologie politique du peuple américain*, 1902, p. 25. Davis, *op. cit.*, p. 36.
- (8) *Éléments*, p. 26.
- (9) H. Taine, *Histoire de la littérature anglaise*, 1857. *History of English Literature*, I, tr. by H. Van Laun, Revised edit., 1900, p. 13.
- (10) W. Hellpach, *Die Geopsychische Erscheinungen*, 2 Aufl., 1917.
- (11) G. Le Bon, *Lois psychologiques de l'évolution des peuples*, onzième édit., p. 4.
- (12) (13) *op. cit.*, p. 12.

- (14) op. cit., p. 19.
- (15) op. cit., p. 23.
- (16) op. cit., p. 25.
- (17) A. de Gobineau, *Essai sur l'inégalité des races humaines*, 1853.
- (18) Le Bon, op. cit., p. 35.

五

社會心理學の先驅としての民族心理學が、主として原始民族の精神的共同所産に對して心理學的解釋を加へる方面か、或は又民族精神又は民族的性格に關する一定の原理を立て、それによつて現代の各國民又は民族の持つ全體的精神の變異を説明せんとする方面か、の何れかに向つて進み、心理學そのものよりは寧ろ民族學人種學又は社會學の領域に深く入り込んで居た間に、これとは全く趣きを異にせる別個の社會心理學的問題の研究が伊太利及び佛蘭西に發達し、更にアメリカに移入されて著しき發展を遂げて居た。一八九〇年頃から一九一〇年頃に亘つ

て全盛を極めた所謂集合心理學 (psychologie collective) が即ちこれである。集合心理學なる名稱は一八九一年に伊太利の社會學者エンリコ・フェリ (一八五六年—一九二九年) によつて初めて使用されたと云はれて居るが、次いでその弟子 S・シingle (一八六八年—一九一三年) は集合心理學を以て、例へば群衆の如き、特に異質者間の無組織的、暫時的集合を研究する學問であると考へ、之を民族心理學とは全く別個のものに見做した。彼はその著「群衆の犯罪」(一八九三年) に於て、群衆指導者が與へる暗示と、それが群衆に及ぼす影響、更にその結果として群衆が指導者に示す反應を研究し、群衆を爲す時人々は理性の統制力を失ひ、責任感の減弱を來す事等を明かにした。これ以來勃然として起つたのが群衆の心理學である。而して恐らく、集合心理學の最も重要な一部分としての群衆心理學に世人の注目を集めさせたのはル・ボンの著「群衆の心理」(一八九四年) であらう。勿論ル・ボンの此の書は、S・フロイド (一八五六—) の指摘せる如く、彼の獨創によるのではなく、殆ど凡てが既に他の諸學者によつて述べられたものであるかも知れないが、然し彼が既存の學說をよくまとめ、群衆心理學の體系を新しく立て、之によつて此の方面に對する學問的興味を通俗化せしめた功

續は決して没すべからざるものである。

ル・ボンの群衆論は彼の所謂心理的群衆に關する見解の展開である。彼はシゲ
ーレの群衆心の論述と、J. M. シヤルコー(一八八二—一八八五年)一派のヒステリーの研究とに
よつて大に影響された。彼は又上述の如く各民族の優劣を論じた場合、民族が高
等になるほど智能の個人差激しく従て智能を要因として人々を統一することの
困難なるに反し、本能及び情緒の如き非合理的性能は優等民族たると劣等民族た
るとを問はず、萬人平等に共有する所であるとなしたが、この見解を群衆概念の構
成に利用した。かくてル・ボンは單なる多數人の場所的密集を以て群衆と見做し
たのではなく、此等多數人の全員が何等かの事情の下に或る同一の方向に注意を
向け、そこに情緒的又は觀念的合致の心的現象が現れた場合にのみ群衆が成立す
ると考へたのである。然も此の場合現れる心的現象は智的のものではなくて萬
人共有の本能及び情緒に基く心的一様性である。そこには女子や野蠻人又は子
供等に見られ易き傾向、即ち劣等民族精神に特有な傾向が著しく有勢となり、理性
や智能の如き個人差のはげしき性能は、衝動性、動搖性、短氣性、被暗示性、輕信性、誇張

性、開放性、不寛容性、專横性、保守性等のために壓せられて了ふのである。

以上の如く群衆の心理的意味及び特徴を記述したル・ボンLe Bonは更にシゲールSigallと同様に群衆を以て一種の有機體であるが如くに考へ、之を心理學的存在であると同時に生物學的存在であると見做した。又シゲールが群衆を以て社會の原型質

(Primitive social protoplasm)であると考へ且つ宗派、階級、國民等の諸社會形體は何れも

此の原形質の發展であると説いたのと同様に、ル・ボンは自己の群衆概念を極めて包括的なものと爲した。即ち彼の所謂群衆は、人々が直接に同じ場所に集合するか、或は又遠く散在しては居ても一定の組織、黨派、宗派、等に屬し、或は又新聞雜誌その他の通信機關によつて、互に影響し合ふかの何れかの仕方かたで共に考へ共に感じ、共に行動するとき生起する特殊の心的状態を指して名づけたものである。従て群衆は世間で普通に考へられて居るやうな人間集合の一形態として見られて居るのではなく、寧ろ形態の如何を問はず、人々の間に發生する特定の心理状態を指して居るのであるから、街路上の小集合から、全世界に散在する人々の大結合に至るまで、此の特定の心的状態を呈する限り、悉く群衆として取扱はれて居るのであ

る。従てそれは飽くまで心理的群衆たるに止まり、社會學的存在として觀念されて居るものではない。然もかゝる廣義の群衆は結局ル・ボンの所謂無名の異質的群衆、即ち職業、知能、身分等に關係なく、又互に名も知らぬ人々より成る街路上の群衆の如きものを基礎と爲し、その性質を抽出して他の多くの社會にまで適用せしめたもので、宗派や階級の場合には只比喻としてのみ群集と云ふ名稱が用ひらるべきものである。斯くの如く群衆を廣義に解する事は他の多くの學者にも見られる所であるが、それは何れも群衆概念の濫用と思はれる。

ル・ボンの群衆論以後群衆の心理的側面は社會心理學者の殆ど凡てによつて論ぜられ、又その社會的側面も社會學者の重要問題として殆どこれに觸れざる者なき程に研究されて居る。乍然こゝではル・ボン以後の群衆心理學の發展の問題には觸れずに置く。

- (1) The Encyclopaedia of the Social Sciences (Editor, R. A. Seligman), 1934, XIV, p. 51.
- (2) Scipio Sighele, *Delitti della folla*, 1893.
- (3) G. Le Bon, *Psychologie des foules*, 1894.

- (4) S. Freud, *Group Psychology and the Analysis of the Ego*, tr. by J. Strachey, 1922, p. 23.
- (5) *The Crowd, A Study of the Popular Mind*, by Le Bon, English Translation, 12 th edit., 1920, p. 25 f.
- (6) *Ibid.* p. 178.

六

ル・ボン は群衆を以て超個人的集合精神を示すものとは見たが、所謂國民精神の如き永續的恆常的精神を持つものと考へたわけではなかつた。然も彼は、群衆を一種の精神的實體として取扱つた點に於て、E. デュルケム（一八五七—一九一七年）と同様に超個人的な社會精神を主要問題とする社會心理學者の中に數へられるのである。假りに此の種の社會心理學を社會本位の社會心理學と名づけ、後に説明する個人本位の社會心理學に對照せしめる事も出來ると思ふ。而して此の社會本位の社會心理學は所謂集合心理學であつて、群衆、會衆、宗派、階級、國民等の社會形象に現はれ、又は之等を成立せしめる共同的又は全體的精神を直接の問題として研究するものである。而して此の立場を取る社會學者として集合心理學の概念を最大限

に擴大したのはデュルケムであつた。

デュルケムの社會學に對する貢獻を検討せるC.E.ゲールケが云つたやうに、デュルケムの社會心理學を理解せんとせば先づ彼の個人精神に關する概念を心得て居らなければならず、又彼の個人的並びに社會的心理學の理解がなければ彼の著作全體も殆ど捕へ難い。然らばデュルケムの個人心理學は如何なるものであつたらうか。彼は身心の關係に就いては自働現象説と平行説とを排して相互作用説を取り、又精神の成立に關しては心料説(*théorie de matière*)の立場に立つた。彼によれば先づ意識の構成要素たる感覺は、必然且つ直接的に、腦及び諸感覺器官の神經過程に連關したものであり、次いでそれらの感覺が複合すると、最早神經學的條件では説明し難き一層高次の單位たる心像を作り、心像は又複合によつて更に高次の概念を構成する。此等の心像及び概念は生物學的又は生理學的的心理學の法則の下には包括せられざる純精神的の存在であつて、それは又表象と稱せられる新しき綜合を作る。

これをゲールケの要約せる表⁽²⁾によつて示せば次の如くである。

個人精神の中に於て

- (1) 多數の腦細胞は(それらの相互作用により)感覺を生せしめる。
 - (2) 多數の感覺は(それらの相互作用及び結合により)心像を生せしめる。
 - (3) 多數の心像は(それらの相互作用及び結合により)概念を生せしめる。
 - (4) 多數の概念は(それらの相互作用及び結合により)表象を生せしめる。
- 右の如く個人の複雑なる心的活動を心料說的、又は構成心理學的に説明したデュルケムは、更に個人を離れて、社會の心理的説明に入り、彼の所謂集合的表象(*présentation collective*)の如何なるものであるかを示した。同じくデュルケムの作りし表^③によれば次の如くである。

社會精神の中に於て

- (1) 多數の個人的表象は(それらの相互作用及び結合により)社會的表象(集合的表象)を生せしめる。
- (2) 多數の社會的表象は(それらの相互作用及び結合により)高次の、一層純粹に社會的の、社會的表象を生せしめる。

さてデュルケムの「個人的表象と集合的表象」(一八九八年)なる論文中の一節に次の如き説明がある。「集合的表象は、孤獨なる個々人からではなく、人々の集合及び統合から生ぜしめられるのであるから、個人意識に對しては外在的である。疑ひもなく各個人は此の共通の結果の生成に對しては應分の關與を爲すのではあるが、然も人々の私的感情がそのまゝ、社會的になるのではない。但し此等の私的感情が社會結合の發展せしめる特殊の力の下に於て結合することはある。その場合には私的感情は此等の結合、及びそれから生ずる相互的變化の結果として私的感情そのものとは別のもの (autre chose) となる。即ち集められたる諸要素を凝集し統一する化學的綜合が起り、此の綜合の過程によつてそれらを變化させて了ふのである。かくて得られた合成は個人精神を超えて擴がるが、これは全體が部分よりも大なるがためである。此の全體が眞に如何なるものなるかを知るためには、吾々は全體を全體として捕へなければならぬ。個人意識の介在なくして意志、感じ、作用する事は出来ないかも知れないけれども、兎も角此の場合には全體が考へ、感じ、意志すると見るべきである。この事は又此の社會的現象が何故に個

々人の人格的性質に依存せずして生ずるかの説明ともなる。何故ならば、此の現象の進展の行はれる融合の中に於ては、凡ての個々人の多様な性格は相互的に中和せられ消散されるからである。而してその場合只人間本性の最も一般的屬性のみが沈まずに残るけれども、それも亦、その極端なる一般性の故に、全體の集合的事實を特徴付けて居る特殊複雑なる形式を説明し得ざるものとなるのである。

この引用文中に見られる「全體は此れを構成する各部分よりも大である」と云ふ一般原理は、生命の現象が各細胞の單なる物理的化學的理論以上のものである」と云ふ生物學的思考に對應したものであつて、社會を個人の心性に依て説明し、或は又社會の影響の下に成長して行く個人を説明せんとする個人本位の社會心理學とは反對に、社會本位の立場を明かにしたものである。この事は亦彼が「全體によつて全體を、複雑なるものによつて複雑なるものを、又社會によつて社會的事實を説明すべし」と主張した點に於て一層よく窺はれる。

さて次にデュルケムは集合的表象、即ち社會的精神と呼ばれるもの、特徴として如何なる性質を捕へたであらうか。第一には外在性(exteriorite)第二には拘束性

(constraint) が之である。前掲ゲールケの表に示されて居た如く、デュルケムは社會的表象には個人精神相互の作用によつて生ぜしめられるものと、更にそれらの社會的表象の相互作用によつて生ぜしめられる一層高次の純社會的のものとを認めたが、兩者とも、個人精神にとつては、如何にも外に在るやうに思はれると云ふ意味に於て外在的である。心理學者の中にはデュルケムの所謂外在性を以て極めて高調に達した個人の情緒的知覺の投影と解す者もあるが、デュルケムはさうは云はなかつた。何故ならばデュルケムは、如何なる個人意識も社會精神の一小部分以上のものを含み得ない」とか、宗教的思想、例へばトーテミズムの如きは外部から個人に來り、「科學は個々の科學者にとつては外から來る所の思想の大アンサンブルである」と考へて、此の外在性こそは彼の所謂社會的事實を決定する二つの主要條件の一つと見たからである。而して今一つの條件たる拘束性は結局個人的表象に對する社會的表象の優勢に基いて生ずる性質である。又彼は、時間的にも空間的にも個人を凌駕する社會は、それ自體の威光を以て神聖化した行動、及び思考の方法を個人に對して強制するの立場にある。社會的事實の特性たる此の

威壓力こそは、全體が個物に對して加へる壓力である」と云つて社會的事實としての社會精神が個人に對して持つ拘束性を説明した。

以上はデュルケムの社會學に於て取扱はれた社會精神の性質及び作用に關する社會心理學的問題の大要であるが、要するに、彼が「假令個人が除去されても社會はそのまゝ残る。それ故吾人は社會生活の説明を社會そのもの、性質に於て求めなければならぬ」と主張した點、即ち飽くまでも社會本位の立場を取つた點は多くの心理學的社會學者に多大の影響を與へ、且つ個人本位の社會心理學に對しては著しき對照を爲して居る。

(1) C. E. Gehlke, *Émile Durkheim's Contributions to Sociological Theory*, 1915, p. 19.

(2) (3) *Ibid.*, p. 32.

(4) (5) *Ibid.*, pp. 29—31.

Quotations from Durkheim's "Représentations individuelles et représentations collectives," 1898, p. 295.

(6) *Ibid.*, p. 33. Cited from Durkheim's "Le suicide", 1897, p. 257.

(7) *Ibid.*, p. 33. Cited from Durkheim's "Les formes élémentaires de la vie religieuse", 1912, p. 13.

(8) *Ibid.*, p. 33. Durkheim, *op. cit.*, p. 246.

(9) Cf. Durkheim, *The Rules of Sociological method*, tr. by S. A. Solovay and J. H. Mueller, 1938, p. 10.

第十九世紀末の社會心理學史上、デュルケムと並んで、最も重要なる位置を占めたのはJ.G.タルド（一八四三—一九〇四年）であつた。此等二人の佛國社會學者は共に廣義の集合心理學を展開した代表者ではあつたが、然も彼等の主として取扱つた社會心理學上の問題は同一ではなかつた。タルドはデュルケムを評して餘りに空論的であるとして爲し、後者は又前者を評して餘りに主觀主義的であると考へた由であるが、此等の評言の適否は別として、兩者の社會心理學上の傾向にも著しき相異のあつた事は認められる。デュルケムは個人に對する外在的社會精神又は集合的表象の客觀的存在を主張する徹底的な實在論者であつたが、タルドはかゝる形而上學的精神の實在を認めざる唯名論者であつた。又デュルケムは、既述の如く、與へられた社會的集合體例へば原始宗教團體の集合的行動の形式及び機能を問題と爲し、之を所謂集合的表象の如き形而上學的概念によつて説明せんとしたのであ

つたが、之に反してタルドは人々が心的相互作用によつて群衆、公衆、宗派等の集合的統一體となり、一全體として行動するに至る場合の相互作用そのものを問題となし、之を模倣の概念によつて説明せんとしたのである。

タルド以前に模倣を社會科學の方面で重視した學者としてはW・ページョット(一八七六年)を挙げなければならぬであらう。彼は自然淘汰及び遺傳の原理を政治社會に適用して「物理と政治(一八七二年)」と題する興味深き研究を遂げ、その中で模倣が人類の本能的性能である事、又國民社會の成立が物理的な人種的共通性に基くよりは寧ろ模倣によるものなる事を主張した。例へば最初は少數の有力者の示した例を多數者が慢然と眞似て行くのであるが、これによつて慣習の一様性が生じてくると、今度は此の慣習を破るものに對する迫害が行はれるやうになり、然も新奇なものを好んで模倣せんとする傾向と、舊慣を墨守せしめんとする迫害との、この互に相反する二つの傾向は實はよく調和してこれによつて國家生活に適したものは絶えず新しく加へられ、適せざるものは淘汰されて行くのである。

ペーショットによつて注目された模倣の現象を更に重視し、之を根本原理と考へて一切の社會の説明に用ひたのはタルドであつた。勿論純粹の心理學者にあらざるタルドは模倣の心理學的機制について十分なる研究を遂げて居たわけではない。従て彼の模倣概念の曖昧性及び濫用に對しては、その同時代及び後世の學者から種々の批難をうけたのではあるが、然もその獨創的見解と社會學を確固たる心理學的根柢の上に立てんとした企とは、當時刮目に價するものがあつたのである。

タルドは「模倣の法則」(一八九〇年再版一八九五年)の序文の中で次の如く述べた。「私の云ふ意味の模倣とは、云はゞ意慾的なる^レと否と、受動的なる^レと能動的なる^レとを問ふ事なく、精神間の寫眞の印象を云ふのである。此の意味の模倣が二個の生物間に何らかの社會學的關係が存する所に於ては常に存在することを觀察するならば、社會學者が此の概念を騎哨として立てる事は許されねばならぬであらう」(風早八十二譯、模倣の法則三頁)と。即ちタルドは模倣作用を寫眞にたとへてそれは「距離を置いた二個の腦の間の一作用であり、その作用たるや、一の腦と云ふ銳感性の種板によつ

て他の一の脳と云ふ像が半ば寫眞術的に寫し出されると云ふ作用より成立つものに外ならぬ(同上、三頁)と爲した。かゝる意味での模倣を彼は社會現象中に認められる反覆、即ちある現象が人から人、集團から集團へと普及して行く事實を示す最も便利なる概念として用ひ、凡て社會的なる事の本質は、模倣に存すると主張した。従て彼は一切の社會集團を、現に模倣しつゝある人々、又現に今模倣し合つて居なくても、相互に類似して居てその相互に持つて居る共通の特性は昔、何れも同一の模型を模寫したものであるが如き人々の集合(同上、一三二頁)と考へ、結局社會とは何ぞや」と云ふ問題に對して、それは模倣である(同上、一四四頁)と云ふ有名な結論を爲したのである。

タルドは他方その著「社會心理學研究」(一八九八年)の中で、要素的社會的事實は或る有情者が他の有情者に及ぼす作用より生ずる意識の交流、又は變更であり、又社會の本質は心と心との相互關係に在ると云つた。即ち彼は飽くまでも心的相互作用を社會關係と見て居るのであるが然も彼に従へば或種的作用、例へば呼吸の如き作用は同じ社會内の多數の人々によつて行はれても決して社會的作用では

ない。然るに、誰か或る人に話をしかけたり、偶像に祈禱を捧げたり、衣物を織つたり、木を切つたり、敵を刺殺したり、石に彫刻を施したりする動作は何れも社會的である。何故ならばかゝる動作は社會生活をなす人々によつてのみ可能であり、もし人々が幼少の頃より、意識的又は無意識的に真似して來た他人の示例がなかつたならば、斯様な動作はしなかつたかも知れないからである。斯くて社會的事實の共通特徴は模倣的なる事に在る。以上の如く解して更に模倣に於ては、その動機及び機制を詮索する必要を認めず、注目すべきは只客觀的事實としての模倣そのものであると主張した。

タルドの扱つた社會心理學上の問題として更に注意すべきは、公衆 (Public) の研究である。彼は一九〇一年に「輿論と群衆」と題する、組織的論述とは云へないが、然も集合心理學上貴重なる、一書を著した。彼は大體に於てル・ボンの述べた群衆心理の説明を肯定し乍らも、群衆とは異なる公衆なる社會的形象を認め、兩者を混同する廣義の群衆概念を否定した。彼の所謂の公衆とは暗示が觀念の形式に於て傳達せられ、又身體的接近なくして心的感染の行はれ得るが如き高度の社會的進

化を必要とする純精神的存在であつて、肉體的には隔離して居るが心理的には互に結ばれて居る人々の分布である。彼はかゝる意味での公衆に關して、群衆心理學とは別個の、公衆心理學(*la psychologie du public*)の成立すべき餘地の殘されて居る事を指摘した。

尙群衆と公衆の性質を比較して彼は次の如く述べた。「群衆は過去の社會集團である。社會集團の中で家族に次いで最も古きものである」。公衆は未來の社會集團である。「吾人の世は群衆の世なり」と云ふ健筆家ル・ボン博士に贊成する事は出來ない。今の世は渾一的な公衆、又幾多の公衆の世である。(赤坂靜也譯、輿論と)これらの主張によつても明かなる如く、タルドは公衆こそは社會心理學に於て最も新しき、而して未來に於て益々重要性の加はるべき研究對象の一つなる事を示した。又彼に従へば、群衆は單に特定の感情及び行動上の統一性を示すばかりでなく、更に限られた場所に、限られた時間中にのみ生ずる集團であるが、之に對して公衆は之を大にしては、全國的、全世界的にも擴大された廣き地域に散在して然も一致的思想傾向を示し、同様の作用をなし得るの能力を示す人々の結合である。タ

ルドは公衆を以て「擴大せる群衆なり」(赤坂譯原)と云ふ(著序二頁)とか「道德的群衆なり」(同上、一四頁)とか、或は又「精神的集團なり」(同上、三頁)とか述べたが、此等の言葉は、云ふまでもなく、公衆が場所的に人々の密集せるものでなく、廣き地域に分布して居るものである事、又群衆の如き衝動的、盲目的行動を特徴とするものでなく、思慮的であり、傳統をよく守るものである事、更に互に肉體的には隔絶して居るに拘らず心理的にはよく結合して居る事を意味して居る。タルドは又公衆が文學界(*le monde litteraire*)又は政治界(*le monde politique*)等と稱せられる時の界と混同せられ易き事を指摘して、界の概念は大體同一界に加つて居る人々の間の個人的な接觸、訪問、招待の交換等を含むものであるが、かゝる關係は公衆の成員の間には存在して居ないと述べて居る。これは公衆成員相互の關係が密接でなく、極めて稀薄であり、又面識もなく、直接の交渉もなき事を明かにしたものと云へやう。更にタルドは公衆と群衆との著しき相異點として人々が一時に二つ或はそれ以上の群衆の成員となる事は出來ないのに、同時に數個の公衆の成員となれると云ふ事實を擧げてゐる。これ公衆が人々の身體的接近を必要とせざる純精神的存在である事より生じた特徴で

ある。群衆が何れも自然力に服従し晴雨寒暑に支配され、冬に於てよりも夏に於て多く現はれると云ふやうな事もタルドの注目した所であるが、此等の物理的環境や季節陽氣の變化等は公衆の存否には關係がないとされて居る。公衆が新しき時代の存在である事を證明せんがため、タルドは彼の所謂公衆なる語の意味を含む言葉が希臘語にも、羅典語にも見當らない事、又古代及び中世には群衆はあつても公衆は存在して居なかつた事を述べ、公衆の最初の誕生は十八世紀に於ける印刷術の發明に基く事、然も眞の意味の公衆は、無數の讀者にその日々の事件を迅速且つ同時的に知らせ得る新聞紙の發達以後に成立した事を主張した。かゝる讀者は互に自分達が讀んでゐる新聞の報知に對して同時に注意を拂ひ同様の反應を爲しつゝ、ある多數者の一員なる事を多少とも意識し、從て集合的の一致的行動の爲し得る可能性を示してゐるのであつて、これ等の讀者は眞に一種の公衆であると考へた。公衆の存在はやがて公衆の「判斷の總體」(ensemble des jugemens)としての輿論の發生を可能ならしめる。かくてタルドは「肉體に意識のあるやうに、公衆に輿論があり、從て公衆を研究すれば當然輿論に到達する事が出来る」赤坂

譯同上六九頁と稱してこの方面へも論及したのであつた。

フランスの集合心理學、殊にタルドの心理學的社會學を米大陸に移入し且つ之を發展せしむるに力のあつたのはE.A.ロッス(一八六六—)であつた。ロッスは一九〇一年に既に「タルド(8)の模倣の法則を自由な形で翻譯したもの」と思はれるやうな部分を含む「社會統制」を著し、次いで一九〇八年には「米國(9)に於て社會心理學なる名稱を表題とせる最初の著書」を發表した。何れもフランス流の集合心理學又は集合的行動の理論を、主として當時の社會的事件及びブルボン(10)の扱つた資料等に應用して一般社會現象の心理學的解釋を爲したものである。先づロッスの社會心理學に與へた定義に従へば、それは「人々(10)が社會生活を營む結果、彼等之間に生ずる心的平面 (psychic plane) と心的潮流 (psychic current) とを研究する。それは又人々の相互作用と云ふ社會的原因によつて生せしめられる感情、信念、意慾、從て又行動に於ける一様性を理解し説明せん事を求めるものである」。又彼の主張によれば人間は生れ乍らにして互に種々異なる素質や傾向を持つものであり、かかる個人差

を持つた人々が社會生活を營むときには互に影響し合つてそのため言語、宗教等から衣服、食事、娛樂等に於ても比較的少數の同一類型に統一され、天賦の個性を或程度迄捨て、社會全般に互る大きな一様性の心的平面又は潮流を示すものである。こゝに心的平面と云ふのは習慣、風習、習俗、傳統、言語、宗教等のやうに、比較的に長き時代に互つて人々を統一する固定的又は平靜なる心理的社會的一様性の事であり、又心的潮流と云ふのは流行、時好、恐慌、熱狂等の如く一時的には人々の心を風靡するが、應て間もなく消滅するか、變化して了ふやうな心理的社會的一様性を指すのである。かくてロツスの社會心理學は結局かゝる意味での心的平面及び潮流の研究にあるのである。

元來社會生活を爲す人々の示す一様性には色々の原因によるものがある。けれども社會心理學の問題とする一様性は人々の心と心の相互作用、即ち社會的原因によるものでなければならぬ。斯く考へたロツスは從來の差異的民族心理學者の述べた事、即ちニーグローは一般に御喋りであり、ジプシーは放浪性に富み、マレー人は執着深く、マジヤール人は音楽好き、スラヴ人は神祕的傾向強く、チユー

トン人は冒險性を持ち、アメリカ人は落ちつきがない等の特性は何れも人種的體質及び體形の生理的原因に基くものであるから社會心理學の問題ではないと云つて、之をその領域から驅逐した。又山岳地方の住民が獨立心に富み、海洋を航行する水夫が迷信に陥り易いと云ふやうな事は地理的環境に歸因する一様性であり、更に又牛飼カウボーイは向ふ見ずの氣質を持ち、百姓は保守的で然も疑ひ深いと云ふやうな事は共通の生活條件に歸因するのであるから、それらも亦社會心理學の關與すべき問題ではないと爲した。

ロツスは又タルドの所謂劣者下等による優者の模倣imitation du supérieur par l'inférieurの法則を巧みに應用して、社會心理學が夫々心的相互作用に於ける「社會優越social ascendancy」と「個人優越individual ascendancy」との二つの異なる場合を研究する部門部門に分たれると爲した。こゝに社會優越と云ふのは多が一を決定し、社會が個人を抑壓し、或は社會環境に依る凡庸なる人々の人格の形成の行はれる場合を意味し、又個人優越とは一が多を決定し、個人が社會を制御し、偉人による社會環境の形成の行はれる場合を指して居る。而して彼は特に社會優越が計畫的に利用

される社會統制の現象と、それが無計畫的に自然に現れる社會的影響の現象とを注目して此等の現象に就いて多くの具體的實例を擧げて論述を爲したのである。要するにロッスの社會心理學は大體に於てタルドと同様の社會本位的集合心理學であると見て差支ない。

- (1) The Encyclopaedia of the Social Sciences, XIV, p. 513.
 - (2) W. Bagehot, *Physics and Politics*, New edit., p. 92.
 - (3) *Ibid.*, p. 97 ff.
 - (4) J. G. Tarde, *Les lois de l'imitation*, septième édit., p. viii.
 - (5) (6) Tarde, *Études de Psychologie sociale*, 1898, p. 64 f.
- Davis, *op. cit.* p. 149.
- (7) Tarde, *L'opinion et la foule*, 1901, quatrième édit., 1922, p. 2.
 - (8) F. N. House, *The Development of Sociology*, 1936, p. 320.
 - (9) G. Murphy, *Historical Interpretation to Modern Psychology*, 1929, p. 292.
 - (10) E. A. Ross, *Social Psychology, An Outline and Source Book*, 1908, p. I.
 - (11) Tarde, *Les lois de l'imitation*, p. 292.
 - (12) Ross, *op. cit.*, p. 4.

今まで述べて來た諸種の問題は、民族心理學の場合を除き殆ど皆社會學の對象として社會學者に依て考究されたものである。社會の本質、從て又一切の社會的事實を心理的のものに見做し、心理學を以て社會學の依據すべき基礎科學となす事が、果して社會學そのものにとつて、正當であるか否かは疑問である。然るに既に社會學内に於ては心理主義排斥の傾向が現れ、それに伴ふて、少くとも從來の心理學的社會學の取扱つて居た諸問題が今では寧ろ社會本位の社會心理學、又は社會學的社會心理學の問題として研究せられるやうになつて來た事は明かである。民族精神、社會心意、集合的表象等をはじめ、心的相互作用及びそれより生ずる一切の社會現象はW・マクドウガル(一八七一—)(但しその著集團心意の第二部以下)及びロツス(但しその著社會心理學)に依て、明確に社會心理學の領域内に於て取扱はるべきものとされたのである。然るに此の種の社會本位の、或は又社會學的の社會心理學に對抗して、これとは全く趣きを異にせる、個人本位の、或は又心理學的の社

會心理學がマクドゥガル(但しその著社會心理學序説)によつて主張せられ、更にこの傾向はF・H・オールポルトに於て最も明確なる姿を示し、今日に於ても壓倒的勢力を保持しつゝあるのである。

社會本位の社會心理學は、上述の如く主として心理學的社會學として、一八九〇年頃から一九一〇年頃までの間全盛を極めたものであつた。然もそこに取扱はれた諸問題は、何れも通俗的興味を惹き易いものであつたに拘らず、實驗的論證を缺いた爲、結局は曖昧な、非科學的な記述を受くるに過ぎなかつた。社會心理學の此の曖昧性、非科學性に對する不満はやがて一九一〇年頃から擡頭して來た個人本位の社會心理學によつて表明され、社會の心意、又は社會の現象を根本的に理解するためには、只漠然と超個人的の精神や心的相互作用を取扱ふのではなく、寧ろ社會成員としての個人を對象としてそこに社會的要因を求めなければならぬと云ふ主張が強調せられた。

米國心理學の祖、W・ジェームズ(一八四二—一九一〇年)の心理學原理(一八九〇年)は後世の社會心理學の發達にとつても重要な貢獻を爲した。殊にその本能論と自我論と

は夫々これから述べんとする二種の個人本位的社會心理學、即ち本能論的社會心理學と、人格形成論的社會心理學との發展の源をなしたものと云へる。而して此の中本能論的社會心理學は先づ一九〇八年に社會心理學序説を著した英國の心理學者マクドウガルに於て最も有力なる代表者を示した。

マクドウガルの社會心理學に對する態度は從來多くの學者によつて示されて居たものと甚しく異り、個人本位的傾向を最もよく發揮した。即ち彼（1）に従へば、社會心理學は先づ個人の中に生れ乍らにして具つて居る傾向と能力とを認め、此の傾向と能力とから如何にして社會の複雑なる精神生活が形成せられるに至るかを示し、逆に又社會の複雑なる精神生活が個人の生得的傾向及び能力の發展及び作用の上に如何なる影響を及ぼすかを研究する學問である。而して社會心理學の最も重要な任務は本來下等の動物より進化し、從て今日でも尙他の動物と共通の點を多く有する人間が多數相集つて社會生活をなす時、何故に高き道德的性格及び活動を有する複雑なる精神生活を實現するに至るかを示すにあると。

以上の如く主張したマクドウガルは何よりも個人精神の理解を以て社會心理

學の根本問題であり且つ前提であると考へ、先づ人間活動の生得的動機力としての本能の性質を究め、その綿密なる分析をなし、更に本能と情緒との關係を明かにした。彼によれば、本能は一種の、遺傳的生得的の、精神物理的素質であつて、之を持つ者をして一定種類の對象を知覺させ、それに注意を拂はしめ、又かゝる對象を知覺した場合には特定の性質の情緒的亢奮を経験せしめ、それに對して一定の仕方
の行動をなさしめ、又は少くともかゝる行動への衝動を経験せしめるものである。本能をかくの如き意味に解し、然も本能が、本質的には、決して變化するものにあらざるを認め乍ら、彼は更にそれが實際の社會的環境の壓迫を受けて漸次に複雑化するシステムの中に織り込まれて行く有様を敘述し、各々の本能が人間の社會生活に於て果す役目を詳細に説明し、以て結局人間の道德的性格又は行動の形象が、性格形成の過程を支配する本能を基礎として内部から完成されて行く有様を示さんとしたのである。彼が飽くまでも社會心理學の對象を個人の精神に求め、人々の間の心的相互作用と雖も個人心理學の法則以外の法則を含み得るものにあらずと考へた事は社會心理學史上特に注意すべき事であつて、事實社會心理學は

マクドゥガルの此の主張以來急激に個人本位的となり、社會學的であるよりは益々心理學的となる傾向を帯びて來たのである。

マクドゥガルの社會心理學序論は右の如き意味に於て極めて刺戟的な影響を學界に及ぼし、本能その他の生得的傾向に基いて個人の行動、更に社會の成立、過程、保持等を説明せんとする所謂本能論的社會心理學者の續出を見せたのである。

而して此の派にも亦諸本能の中の何れを要因として重視するかに従て種々の別が分たれる。今P.⁽³⁾ソロキンの用ひた要約に従へば(一)性的本能及び性的差異の社會的機能を説く立場(例へばフロイド一派、H.エリス、E.ウエスターマーク、W.マクドゥガル等)(二)親的本能の社會的動力を重視する立場(例、W.マクドゥガル、C.サーヴァンド、E.ウエスターマーク等)(三)群居又は集團本能の社會的動力を要因と見る立場(例W.トウロッター)(四)その他鬭争、恐怖、好奇、勞作、解放、蒐集、獲得等の本能を説明要因とするもの等が認められる。けれどもマクドゥガルの所謂本能にしても、或は又精神分析學者の所謂リビドーにしても、ソロキンの云ふ如く、人間及び人間活動の背後に幾つかの不思議なスピリットを假定し一切の現象を此等の本能スピ

リットの發現として説明せんとするもので、云はばアニミズム的解釋に過ぎない。それは不明なる事を一層不明なる事によつて説明する(*obscurum per obscurius*)事であるとの非難を免かれ得ない。この事は心理學的社會學の一部に於て一時盛行はれた信慾説、關心説、社會力説等に於ても同様である。此等の説は何れも本能論者に準ずる立場を取り、人間に共有な或る種の心理的經驗を抽象して、之を人間の行動及び社會過程の生ずる根本動力と考へ、又一切の社會過程を説明し解釋する手段に用ひたものである。それらの所謂心理的經驗の多くは内觀的に直接體驗出来るものではあるけれども、何れも社會活動の根本要因と見做すには、本能以上、複雑又は曖昧なもの、或は又餘りに主觀的のものである。次に社會現象の根本要因として挙げられた心理的經驗とこれらを要因と認められた學者との名稱を示して置く。

- 一、 信念、慾望、動能(例、G・タルド、L・F・ワオード、E・A・ロックス)
- 二、 關心(例、G・ラッツェンホーファー、A・W・スモール)
- 三、 願望、執意、態度(例、T・トマス、P・パーク、F・バーデス)

四、觀念、情操、情緒等(例、E・ド・ロベルテイ、A・フイエ)

右の中例へばタルドは一切の社會現象を信と慾とに還元し、逆に又信と慾とを以て一切の社會現象の本質と考へて所謂信慾説を立てた。彼に従へば因素的社會行動たる發明と模倣も、實は一定量の信と慾との發現である。而して一定量の信と慾とは實に「國語の總ての單語、宗教の總ての祈禱、國家の一切の行政法規、法典の一切の箇條、道德の總ての義務、工業の一切の仕事、藝術の總ての方法等、凡ての社會的行動の精髓である」(米田庄太郎著、經濟心理學)とさへ考へられたのである。タルドはヴントの主張せる心理的要素としての感覺を全く他人に傳へる事の出來ぬ純個人的のものと考へ、之に反して信と慾とは模倣し、模倣される社會的過程の内容となつて、人から人、時代から時代へと傳へられるもの、從て其の意味で一切の社會結合の根本要因だと見做したのであつた。けれどもタルドはラッツェンホーファーの所謂關心と同様、本能なる生物學的概念の代りに、これに劣らず真相を究め難き、信と慾なる心理的概念を用ひたに過ぎず、これまた不可解なるものを一層不可解なるものによつて説明せんとするの誤謬に陥つたものと云へるのである。

本能論的社會心理學は心理學的社會學の心理的説明に缺けて居た確實性と科學性を自ら實現すべく花々しき出發をしたに拘らず、その所期の目的を實現し得ずして早くも、主として實驗心理學者側の猛撃に遇つて、衰へはじめ、やがて人格形成論的社會心理學のために壓倒せられるに至つた。その間にあつてマクドウガルは自己の主張した個人本位的の立場を去り、社會本位的立場への轉向を示した。即ち一九二〇年の彼の著「集團心意」はその後の彼の社會心理學的思想の展開を示したものである。彼に従へば前著「社會心理學序説」は全く「豫備的」のものであり、單に社會心理學建設のために敷地を開き土臺を置くためのものに過ぎなかつた」と。乍然彼の後の著「集團の心意」が果してよく先に築かれた本能論的社會心理學の土臺の上に立てるものと見做し得るか否かは疑はしい。生物學的本能論的土臺の上には彼の「集團の心意」に現されたやうな上層建築は適合しないのではないかと思はれる。

彼によれば、個人と、その個人の所屬する社會との相互關係を認め、之を説明せんとする心理學は凡て社會心理學と呼ぶべきである。而して社會心理學は個人

の生長及び活動に及ぼす集團の影響を記述し説明する方面の外に、更に集團生活そのものを取扱ふ方面をも含むべきであつてこの後の方面こそは社會心理學の一分科としての集團心理學の領域なのである。然もこの意味での集團心理學は「集合的心意又は集團心意の概念を檢討して、果してそれが妥當なる概念であるか否か、又妥當なりとすれば如何なる意味に於て妥當なるかを示し、又孤立的な個人の心的生活の法則からは還元する事の出来ないやうな集合的心意生活の一般原理を明かにし、集合的心意生活又は集團心意の主なる類型を區別し、且つ此等の類型の特徴を記述して出来るだけ精密に説明する事」を以て任務とするものとされて居る。マクドウガルはこの任務を要約して、第一には集團生活の一般原理を設定する事(之を一般的集合心理學とも云ふ)、第二には此等の原理を適用して集團生活の個々の實例を理解すべく努力する事と爲した。かくて彼の著「集團の心意」は「社會心理學序説」に於て排除されたかに見えた集合心理學を再び呼び戻し、之を前に築いた土臺の上に据えつけたやうに思はれる。彼が「社會」と云ふ集合體は一種の個性を持ち、之を構成して居る各部分の性質及び様態を、大體に於て、決定する所

の其の一全體である」と云つたり、或は又「⁸⁾社會的集合體は、單に構成單位たる個人の心的生活の總和にあらざる、一種の集合的心理生活を持つてゐるから、社會は單に此の集合的心意を享受してゐるばかりではなく、集合的心意、又は或る人々の好んで云ふ所の、集合的靈魂をも持つて居る」等と述べて、デュルケム流の社會精神實在論に傾き、R・M・マキーバー(一八八二—)の社會精神唯名論と著しき對立を示すにさへ至つたのである。マクドウガルの此の一見逆轉と思はれるほどの變化は、乍然彼の思想の必然的發展であつて、「社會心理學序論」の中に既に含まれて居た行動主義的機械觀の排斥と、目的論的立場の強調とに根ざしてゐたものと思はれる。彼の「社會心理學序論」は、結局、人類の共通的生得的傾向、殊に本能の分析と解釋とに過ぎなかつたのであつて、その思辨的本能論の中に潜在して居た形而上學的傾向がやがて「集團の心意」に於て前景へ浮び出て來たものとも考へられるのである。それは兩著を通じて示されたマクドウガル自身の目的論的社會觀の展開でもあつた。

(1) W. McDougall, An Introduction to Social Psychology, 8th edit. 1923, p. 18.

- (2) Ibid. p. 29.
- (3) P. Sorokin, *Contemporary Sociological Theories*, 1928, p. 605 ff.
- (4) Tarde, *Les lois de l'imitation*, p. 157.
- (5) W. McDougall, *The Group Mind*, 1921, p. 2.
- (6) (7) (8) Ibid. pp. 7—8.
- (9) R. M. Maciver, *Community, A Sociological Study*, 1917, p. 12 ff.

九

本能その他の生得的傾向又はそれに準ずる心的経験を重視する個人本位的社會心理學と並んで現れた他の個人本位的社會心理學は環境を重視するものであつて、これを假りに人格形成論的社會心理學と呼ぶ事とする。兩者とも社會生活を營む個人の人格又は性格が如何にして發達するかと云ふ事を中心問題として居るのではあるが、茲で云ふ人格形成論的社會心理學は、本能論者の場合とは異つて、人の人格又は行動の形象の完成は環境、殊に心理的社會環境の影響の下に成ると説くのである。換言すれば本能論者が遺傳的又は生得的の傾向を根本要因と

見做し、それに依て人類社會の諸現象を心理的に解釋せんとするのに反して、人格形成論者は遺傳的生得的傾向を全く無視するわけではないが、それよりも寧ろかゝる傾向を有する人間が、社會生活を營む事によつて、後天的又は習得的に作る心理的特徴を重視し、その依て來る所を社會的環境に歸せしめんとするのである。それ故此種の立場を取る一派をL・パーナード(一八八一)は環境主義社會心理學者と名附けたが、然し此の場合の環境主義と云ふのは自然環境を重んじ、それが人格の形成に及ぼす影響を説かんとする所謂風土心理學的傾向のものを指すのではなく、主として心理的社會環境の人格發達に及ぼす影響を研究するものであるから、茲では環境主義と云ふ言葉を避けて人格形成論的社會心理學と呼ぶ事にするのである。

さて人格形成論的社會心理學が如何なるものかを述べる前に、此の派の重視する社會環境の意味を明かにして置かなければならない。環境に就いては從來種々の分類が行はれて居るがこゝでは社會心理學者としてのパーナードの爲せる分類を例示する事とする。彼(註)に従へば、環境は先づ(一)物理的(又は無機的)環境、(二)生

物的(又は有機的)環境の二つ、即ち純粹の自然として存在する所謂自然環境の外に、更に(三)社會的環境及び(四)複合的又は制度化された派生的統制環境とが分けられる。自然環境が、直接又は間接に、個人又は集團の生活に及ぼす影響の少からざる事は云ふまでもないが、然しそれは社會心理學の問題ではない。社會心理學の問題としての環境は主として社會的環境及び統制環境である。而してパーナードは此の社會的環境を、(イ)物理的社會環境、(ロ)生物的社會環境、(ハ)心理的社會環境の三つに分類した。此の中(イ)と(ロ)とは、夫々物理的並びに生物的、自然環境を人爲的加工によつて變形又は變質せしめ、以て人類の社會生活に適應させたものであるから純粹の自然として存在するのではない。その中、人間を除いた物理的又は生物的社會環境としては諸種の道具、武器、機械等や、汽車、電車等の運輸機關、電信、電話等の通信機關等或は又衣食住、藥物、裝飾等に使用される培養植物や、食用、動力、愛玩等のために飼養される家畜、家禽、或は藥品、香料等に作られた有機物等が挙げられる。他方人間に就いて云へば人格的立場を離れて見られた人々、例へば奴隸、勞働者等として役立つ人々、娛樂や裝飾に用ひられる人々、隨意的又は職業上の勤務を提供

する人々、軍隊、職工團等の如き編成された人間集團、言語を用ひて隨意に協働する人々等を生物的社會環境と見做すのである。けれども人類は他の生物と異つて單なる生物的存在であるばかりではなく、優れた精神の力によつて複雑なる心理的社會環境を生せしめる。即ち人々の觀念、信仰、思想等をはじめ、風習、民俗、傳統、原始的規範(Habits)等の如く、廣く國民その他の社會成員の間に共有化されてゐる心理的事實が此處に云ふ心理的社會環境であつて、此等の心理的事實の内容は言語、身振、態度、文字、繪畫、彫刻、書籍、新聞、寫眞等の有形又は無形の象徴を媒介として認識されるのである。尚バーナードの所謂統制環境は種々の社會環境の複合又は派生より成るものであつて、特に一定の社會を一つの統一的結合に規制せしめんがために作られ、時には制度化されたものを云ふのである。その中、一般的性質のものとしては經濟的、政治的、審美的、教育的等の統制環境、又特殊的性質のものとしては夫々の國家、夫々の政黨、夫々の宗派、夫々の主義等として現はれる統制環境が數へられてゐる。

以上は社會心理學で問題とする環境が環境全體の中如何なる種類のものであ

るかを示すために一例として挙げた分類であるが、單に本能その他先天的遺傳的要因、即ちフイエの所謂靜的要因のみではなく更に上述の如き社會的環境、即ち動的要因による後天的習得的影響に注目して社會的存在としての人間の人格又は性格の發達を明かにし、これに基いて社會現象の心理的解釋を下さんとするのが茲に云ふ人格形成論社會心理學なのである。

此の種の社會心理學の萌芽はJ. ロック (一七六〇—一七四二年) をはじめ第十七、十八世紀の經驗論者の中にも求められるけれども、直接的には、上述の如く、W. ジェームズの自我論を以て先驅と見做すべきであらう。ジェームズは從來の學者の認めた經驗的自我と純粹自我との區別に注意を向け、前者を知られる我れ (the self as known or "me")、即ち認識の對象としての我れと呼び、後者を知る我れ (the self as knower or "I")、即ち認識の主體としての我れと名づけた。この中知られる我れは人間が自分のものと稱し得るもの、總體と意味し、物質我 (material me)、社會我 (social me) 及び精神我 (spiritual me) の三方面を含むものと考へられて居る。さてこゝで問題となるのはジェームズの所謂社會我である。人は誰でも自分の交はる他の人々から認め

られ、その人々の心の中に自分についての印象を與へてゐる。社會我とは即ち他の人々の心の中に映じて居る自分の姿であつて、ジエームズはこれを「人がその交友から受ける認識」であると云つて居る。従て人は自分を認め且つ自分に就いての印象を心に懷いて居る人々の教だけの、或は又それらの人々の所屬する集團の數だけの社會我を持つとも云へる。他方、人は一般に相手によつて夫々異なる自我を示すものである。例へば親に對して示す自我、戀人に對して示す自我、教師に對して示す自我は必ずしも同一ではない。この事は「一個の人間として私は君に同情するが、一官吏としては慈悲を示す事は出來ぬ」とか、或は又「政治家としての私は彼を味方と見做す。けれども一道德家としての私は彼を憎む」と云ふやうな日常の會話にも窺はれる。斯くの如く社會我の種々の現はれ方を説明したジエームズは、結局社會我を以て人と人との社會的接觸によつて作られて行くものであると考へ、更に社會我の作用について種々興味ある説明をした。

ジエームズの分折せる社會我の性質はやがて後世の社會心理學に於ける人格形成の問題を中心とする研究を刺戟した。殊にJ. M. ボールドウイン（一九三四年）

C. H. クローレー (一八八六年) 等は此の派の代表者と見られる。

ポールドウインは先づ一八九五年に「兒童及び人種の精神發達」を著し、この中で個人發達辨證法 (the dialectic of personal growth) なるものを唱へ、次いで一八九七年には「精神發達の社會的及び倫理的解釋」を出版して、個人精神發達の諸原理がどの範圍まで社會進歩の説明に適用出来るかを論じて社會發達辨證法 (the dialectic of social growth) を説いた。

然らば彼の所謂個人發達辨證法とは如何なるものであらうか。彼は先づ人間たる^⑧と他の物體たるとの區別なく、與へられたる一切の外界對象を非人格的存在として感覺する(これを客觀的段階 objective stage と云ふ)初生兒の頃から如何にして個人意識が發達して行くかを發生論的に考究して次の三段階を認めた。即ち第一の投影的段階 (projective stage) に達すると、凡て外界の物體は只暗示的に幼兒の心に投影せられ、人間と他の物體との區別をはじめ、母と子守との區別の如き人々の相異も少しづつ、識別し得るやうに成る。然し此の段階に於ては未だ自分自身に就いての意識は起らない。次いで幼兒が稍々成長して自分で積極的に身體を

動かし、簡單乍ら執意的行動を爲すやうになると、受動的な投影を以て満足せず、自ら相手の動作を模倣するやうになる。然るに動作の模倣は一種の努力、緊張、抵抗、苦痛等の經驗を伴はしめる事もあるから、模倣による相手の存在の認識は、單なる外界の投影ではなく、一層切實なもの、直接的なもの、即ち自分に附けるものとなつて来る。これをポールドウインは個人意識發達の主觀的段階(subjective stage)と名づけた。此の段階に於て幼兒ははじめて自己及び自己の經驗を意識するやうになる。然るにやがて子供はこの自分に附ける主觀的の感じを反作用的に相手へ向けて放射し、相手の人にも自分の中に存すると同様の經驗の在る事を類推するやうになる。而して自己と同様な人間としての他人の存在をも意識する。これが即ち放射的段階(ejective stage)であつて、こゝに至つてはじめて放射的な自我、即ちジエームズの所謂社會我が生れ、自他の意識も明かにされてくる。即ち自我意識は他を模倣する事によつて生長し、他に對する認識は自我の認識によつて益、深められる。以上の如く考へたポールドウインは結局自我と他我とは共に模倣の所産であつて本質上社會的のものであり、何れも一種の仲間(socius)であると説い

た。この個人とその周囲の人との相互作用を指して彼は個人發達辨證法と名づけたのである。

ポールドウインは上述の放射的段階に達すると漸次に道德的社會的の自我が發達し、同情や協働の傾向も起り、合理的社會活動を展開せしむべき基礎が固められて來ると見た。斯くの如く個人に於ける社會性の發達を究明した後、彼は又これに對應するものとして社會進歩を説明すべき社會發達辨證法なるものを唱へた。彼によれば一切の社會過程は人々の間に普及する思想の交流より成る。而して社會進歩には、社會にとつて有益なる思想が先づ個人によつて創唱せられる^⑨、特殊化(又は發明)と、その思想が更に社會によつて普及せしめられる^⑩、一般化(又は模倣)との二つの機能が必要である。然るに此の特殊化と一般化とは次の如き段階^⑪を爲して社會進歩を生せしめる。即ち(一)個人は社會に於て既に一般化されて居るものを基礎としてのみ特殊化を爲し得る。(二)社會は新しき變化を得んがため、絶對に個人の新しき思想即ち特殊化に依存し、之を再び一般化しなければならぬ。

(三)古き社會的材料が個人によつて特殊化せられ、更にそれが社會によつて一

般化されると云ふ此の二つの條件が充たされた場合にのみ、社會内容に新しき添加が行はれ、全體としての社會組織に進歩が確保される。この三つの段階をポールドウインは個人發達の三段階に對應せしめて、次の如く解釋した。即ち社會發達の投影的段階とは、新しき思想が只個人の心意中にのみ存する場合である。又主觀的段階は、社會がそれ自體にとつて有益なる個人の思想を採用し、それを制度上に現はすに至る場合である。而して最後の放射的段階は社會が此の思想を具體化して新しく作つた諸制度を一般社會成員に強制し且つ之を尊重せしめる場合である。

以上はポールドウインの所謂個人發達辨證法に對應せしめて類推的に作られた社會發達辨證法の大要であるが、此等の論述によつても明かなる如く、彼は社會環境の中にあつてその影響を受けつゝ形成されて行く個人の人格を綿密に記述し、それに基いて社會過程の心理學的解釋を企てたのである。ポールドウインの斯る人格本位の研究はその後現れた幾多の人格形成論的社會心理學に大なる影響を與へ、その意味から云ふならば F. N. ハウスの云ふ如く、近代アメリカ社會心理

學はホーンズワインによつてその礎石を置かれたと云つても差支ないであらう。

- (1) L. Bernard, Introduction to Social Psychology, 1926, P. 29.
- (2) Ibid. p. 75 ff.
- (3) W. James, Text Book of Psychology, 1892, p. 176.
- (4) (5) (6) Ibid. p. 179 ff.
- (7) J. M. Baldwin, Mental Development in the Child and the Race, 1895.
- (8) Baldwin, Social and Ethical Interpretations, A Study in Social Psychology, 3rd edit. p. 15.
- (9) Ibid. p. 465.
- (10) Ibid. p. 475.
- (11) Ibid. 538 f.
- (12) F. N. House, Development of Sociology, p. 317.

十

現代心理學の科學としての基礎はその實驗的研究に依て固められたと云つても差支ないであらう。一般心理學に於ける實驗の發達は自ら又社會心理學にも反響を呼び、從來の内觀的又は思辨的社會心理學に對する不滿の聲を高からしめ

た。而して此の不滿を除き社會心理學をして眞に客觀的、科學的のものたらしめん事を期して現れたのが實驗的社會心理學である。社會心理學に於ける實驗的研究の歴史を辿る場合、タルドが暗示に關するリエポーやP・ベルネーム等の所謂ナンシー學派、更にA・ビネーやC・フェレ等の科學的研究に基いて模倣の理論を立てんとした事、又ル・ボンが群衆心理をJ・M・シャルコーのヒステリーに關する病理的研究にその根底を求めた事等を擧げて自然科學と社會心理學との接觸の先例とする事も出來ないではないが、此等の例は只間接に醫學上の理論を應用したま

で、未だ直接に社會心理學自體の實驗的研究ではなかつた。

社會心理學に於ける實驗法採用の歴史に就いてG・ムアフィー²は三つの異なる系統の存する事を示した。第一の系統を彼は個人の行動に及ぼす集團の影響の實驗的研究に求めた。彼によれば、今世紀の初期にドイツのA・マイヤーとシュニミットとが教育心理學の方面から、學校作業(Schularbeit)に比して家庭作業(Hausarbeit)の價值如何を定める實驗を行つた事、又一九一四年にC・モエデが個人作業の速度及び筋肉勞働の氣力の増減に及ぼす社會集團の影響を研究したる事は此の第一

系統の實驗に於ける比較的早き實例である。ムアフィーは又第二の系統を人間の個人的特性の中、殊に社會的接觸に關係深き部分を測定研究する方面に求め、更に第三の系統を、例へば輿論や國民の政治的態度等の如き、社會現象の測定を爲す方面に辿つた。斯くの如きムアフィーの分けた三つの系統に從て實驗的研究の行はれた實例を求めて行く事も實驗的社會心理學の如何なるものなるかを歴史的に知るよき方法であらうけれども、こゝではかゝる部分的研究の列擧を行はず、寧ろ現代實驗的社會心理學の發達に對して重要なる貢獻を爲せるF・H・オールポートの社會心理學に關する見解を略述する事とする。

オールポートはその著「社會心理學」(一九二四年)に於て一般心理學が既に築き得たと同様の確固たる實驗的基礎に置かれた社會心理學の樹立を主張した。彼によれば、社會心理學の對象は個人の社會的行動である。從て對象の點から見れば彼の社會心理學を行動論的社會心理學と呼ぶ事も出来る。けれども彼は決して所謂行動主義者ではない。寧ろ彼は極端な行動主義には反對して、意識の重要性をも認め、社會心理學の研究する「現象」は行動と意識との兩者を含むが、只説明の鍵

となる」と云ふ點で、特に行動に重點を置くのである」と云つて居る。それ故彼の社會心理學を行動論的社會心理學と名づけるとするも、それは決して彼が意識の問題を社會心理學の領域から排除した事を意味するのではない。

さて然らばオールポートは自己の社會心理學を如何なるものと解したであらうか。彼によれば一般に行動とは個人と環境との間に現はれる刺激と反應との相互作用である。而してその場合環境が非社會的のものであれば行動も亦非社會的行動となり、又環境が社會的のものであれば行動も亦社會的行動となる。而して社會心理學の對象たる社會的行動は結局個人とその環境の社會的部分との間、即ち個人と周圍の人々との間に生ずる刺激と反應とを含むものである。けれども社會的行動も非社會的行動も共に自己の環境に對する個人の生物學的不調整の訂正を意味する事には變りない。只社會的行動は個人が他の人々との相互關係に於て一定の慾望を充たし、從て自己を周圍の人々に順應せしめるものたるに過ぎない。

右の如く社會心理學の對象を個人の社會的行動に求めたオールポートはかゝ

る立場をとらなかつた從來の社會心理學の缺點を指摘した。例へば群衆意識、集合意識、集團心意等所謂廣義の社會精神と呼ばれるもの、超個人的客觀的存在を主張した社會心理學は、何れも一切の意識が神經系統の機能に基いて生ずるものであり、然も神經系統は個人にのみ具つて居るものだと言ふ事實を無視したものであると爲し、從て群衆の亢奮状態や集合的一様性や組織的集團等の中に於て認められる心的要素は悉く、それらの群衆、集合體又は集團中に在る個々人の行動及び意識の中に發見せられるものゝみであると説いた。彼は又社會を有機體と見做す一切の學説を否定して社會を構成する人々の間には身體の各細胞及び各器官の間に存するが如き組織の連續性がない事、又身體の組織は細胞全體の統合又は安全に基いて居るのに社會體の組織及び機能の統制原理は各部分、即ち個々の成員の利益に存する事を擧げ、結局社會に於ける眞の有機體は社會成員たる個々人のみであり、集團は單に個人がそれに對して反應する社會環境を供するに過ぎないと主張した。

然らばオールポート自身の社會心理學の對象としての行動と意識とは如何な

るものであらうか。彼に従へば元來人々相互の影響と云ふ事は常に行動上の問題である。「或る人が刺戟し他の人が之に反應する」と云ふ此の簡単な過程の中に社會心理學の本質が存するのである。刺戟する行動と、反應する行動とが共に夫々の個人の中に社會的な意識を生せしめる事はあらう。けれども或の人の意識が直接に他の人の意識又は行動を刺戟すると云ふ事は、所謂精神感應（テレパシー）の假説の如き未だその本質の明かにされて居ない現象を除けば、有り得ない。吾々が他の人に與へる刺戟は決して吾々の意識そのものではなく、意識の外的表現又は象徴（サイン）たる行動である。従て行動を除いた心と心の相互作用などは有り得ない。或る學者は社會の概念及び社會心理學の對象を心的相互作用に限定して、心的相互作用によつてはじめて他人についての意識や社會關係の意識が成立すると説く。けれどもオールポートはかゝる限定を不必要と考へ、意識そのものは何の影響をも與へ得ないものであるから、人間同志の相互作用の説明の役には立たない、所謂心的相互作用は實は或る人の行動が他の人の行動に影響する事、即ち行動の相互作用であると説いた。

オールポートは以上の如く論じて結局社會的行動を「社會的刺戟」として役立つか、或は社會的刺戟によつて引起されるやうな行動「の意味に解し、又社會的意識を「社會的態度と、刺戟に對する外表的反應 (overt responses)」と、に伴ふ意識」と定義した。而して此の社會意識の中には

(一) 他の人々及び社會一般に對して取る態度と情緒的及び外表的行動との意識
(二) 吾々のかゝる行動に對して、現に他の人々が如何に反應しつゝあるかを知覺する意識、或は又假りに他の人々がそこに居たら彼等は如何に反應するであらうと想像した場合の意識、

(三) 吾々(社會我)に對する他の人々の常にとる態度と外表的行動とに就いて感覺的に又は想像的に懐く意識、

(四) (イ) 他の人々も亦吾々の場合と同じ對象又は事態に對して反應しつゝある事、
(ロ) 此の場合他の人々の反應が吾々の反應と同じであるか或は又異つてゐるかと云ふ事、此の(イ)と(ロ)とに就いて感覺的又は想像的に生せしめられる意識、
が分析されて居る。斯くの如く社會的行動と社會的意識とを解釋したオールポ

トは社會心理學を次の如く定義した。即ち社會心理學とは他の人々を刺戟するやうな個人の行動、又他の人々の行動に對する反應であるやうな個人の行動を研究し、且つ社會的對象及び社會的反應に就いての意識としての個人の意識を記述する科學である」と。約言すれば彼の社會心理學は結局個人の社會的行動と社會意識との研究である。

この定義によつても明かに了解せられる如く、オールポートの社會心理學は飽くまでも個人を對象としたものであり、個人意識を離れた社會意識や、個人の行動をはなれた社會の行動を否定したものであるから、それは彼自身(9)の主張する通り、個人心理學の一部門である。この事は又既にG・ジンメル(一八九八年)が、當時社會心理學の問題として取扱はれてゐた種々の現象を點檢した後述べた次の如き見解とも一致する。即ち社會心理學の問題として正當に残るものは、社會的環境からの一定の影響の下に置かれた場合、個人の心的過程に如何なる變化が起るか、と云ふ事のみであり、かゝる問題は本質上、個人心理學に屬するものであるから、社會心理學は當然個人心理學の一分科であると。社會學者ジンメルによつて夙に明

確にせられ、更に現代の社會心理學者オールポートによつて具體化された此の見解こそは、現代社會心理學の依據すべき根本方針であつて、かゝる方針に基いてのみ眞に科學的な社會心理學は發展せられるものと思ふ。

- (1) G. Murphy and others, *Experimental Social Psychology*, Revised edit. 1937, p. 4.
- (2) G. Murphy, *Historical Introduction to Modern Psychology*, p. 298 f.
- (3) (4) F. H. Allport, *Social Psychology*, 1924, p. 3.
- (5) *Ibid.*, p. 11.
- (6) *Ibid.*, p. 148
- (7) *Ibid.*, p. 329.
- (8) *Ibid.*, p. 12.
- (6) *Ibid.*, p. 4.
- (10) G. Simmel, *Soziologie*, 2 Aufl., 1922, S. 423.

十一

一般に社會心理學の扱ふ問題の中には、同時に又社會學の領域に屬する如く考へられるものが少くない。従て社會學と社會心理學との混同はこれまで屢々行

はれる所であつた。殊に此の種の混同は所謂心理學的社會學と稱せられる社會學上の一派に於て著しかつたやうにも思はれる。例へば此の派の一代表者たる C.A.エルウッド(一八七三—)は一方に於て「社會心理學序説(一九一七年)と題する著述を爲して、社會心理學が主として心理學上の諸原理を社會學上の諸問題に適用する事に於て成立するもの、如くに説き乍ら、他方又その著「心理學的方面より見たる社會學(一九一二年)と「人類社會の心理學(一九二五年)とに於ては社會心理學を殆ど否定して之を社會學又は少くともその一部と同視して居る。即ち彼によれば社會學は社會集團の起原、發展、構造及び機能の學であつて、その見地又は關心は常に集團そのもの、又は集團的行動に存する。然るに心理學の見地又は關心は一般に個人及び個人行動にある。而して心理學の問題は個人の經驗及び行動を説明するにあり、社會學の問題は集團の性質及び行動を説明するに在る。従て關心が個人から集團へ移るに連れて、それは純心理學的のものから社會學的のものに移る。然るに社會集團及び社會生活一般の心理的方面の研究を社會心理學の任務と考へる者もあるが、上述の如き區別から見れば結局社會心理學は明かに

社會學の一部門であると。

右の如きエルウッドの見解とは異り社會學を以て廣義の心理學の中に包攝せしめたものは英國のW・トウロッターである。彼はその著⁽⁴⁾平時及び戰時の集團本能(一九一六年)に於て社會學は、最も複雑なる精神をも含めて、例外なく精神現象の悉く凡てを包括し得るのであるから、それは最廣義の心理學の別名であり、又これまでの何れの正統派心理學に於てよりも十分なる意味で實際的の學問であると説いた。彼は又社會學が屢々社會心理學として取扱はれて居た事に言及し、社會心理學が普通の心理學と異なる點を、人々が社會關係の中に於て示す精神活動の諸形式を扱ふ事に在ると爲す論者の誤謬を指摘した。即ちトウロッターは多くの論者の認めるが如き社會的と個人的との區別を否定し、兩者は全く相連結したものであるから、一切の人間心理學は社會結合をなす人間に就いての心理學であると主張した。而してその理由として彼は人間は本來集團本能によつて社會生活を營むべく作られたものであつて、社會に所屬せざる孤獨的な人間は有り得ない事を擧げた。斯くて一切の心理學は社會的存在として人間の心理學であり、從て

社會學は、社會心理學と云ふよりは、寧ろ應用又は實踐心理學と見るべきものであらうと云つた。

以上は社會學と社會心理學との混同の例として比較的明かなるものを挙げたのであるが、斯くの如き曖昧な立場に比すれば H・L・シユトルテンベルグの見解は遙に明快なものと云へやう。今 L・フオン・ウイーゼがシユトルテンベルグの見解に基いて主張した心理學、社會心理學及び社會學の關係を示せば次の如くである。

(一) 心理學 —— 個人精神と、更にその生理學的相關現象及び條件とを研究す。

(二) 結合心理學 (Soziopsychologie) —— 個人と或る一人又はそれ以上の人々との結合の結果生ずる意識過程の内容に重點を置く。

(三) 心理的社會學 (Psychosozilogie) —— 概觀的見地をとり、人々の共存的複數性を中心問題となし、更に (a) 集團の全成員中に同一の心的表現の發見された場合、此の集会的心理現象の内容を研究するか、或は又 (b) 例へば暗示等の如き心的交換と、心的交通の相互關係とが觀察せられ且つ分析せられる。

(四) 社會學——心理的過程には關係なしに人々の相互作用の諸過程と、それ等の所産とを研究する。

右の説明の中、心理學及び社會學の部分に就いては夫々の専門學者の間に種々異論も存する事と思ふが、その問題に今觸れる必要はない。茲で注意しなければならぬのはウイーズがシュトルテンベルグと同様結合心理學及び心理的社會學なる二つの部門を分ち、然も兩者を社會心理學(Sozialpsychologie)の中に統合せしめた事である。私はシュトルテンベルグ及びウイーズが用ひた名稱には賛成出來ない點もあるけれども、少くとも彼等が社會心理學の中に、Soziopsychologie即ち社會結合の結果生ずる個人の意識内容を研究する部分と、Psychosozilogie(從來の慣例に倣つて彼等は斯く名づけたらしいが、實はウイーズの社會學の性質から考へて見ても、之は寧ろ社會學的社會心理學とでも稱すべきであつて、社會學ではない)即ち集合的心理現象又は心的相互作用を取扱ふ部分とを明示した事は興味ある點である。私が前十項目に互つて概觀した諸種の社會心理學(又はその先驅乃至近縁の學問)は次の二つの類型に大別する事が出来る。即ち第一は大體に於て社

會本位の見地に立ち、從て心理學としてよりは寧ろ一種の社會學として發達し、そのため Psychosozologie と稱せられた類型である。而して此の中には綜合的民族心理學、差異的民族心理學、群衆心理學、集合心理學等、シュトルテンベルグの系統に於ける(三)の(a)即ち所謂集合的心理現象の内容を取扱ふもの、又心的相互作用の社會心理學や、心的平面及び潮流の社會心理學等即ち、(三)の(b)に相當するものが含まれる。尙民族心理學は社會學の外に、部分的にはあるが、文化史、民族學、人種學等に於ても研究されたものである。

次に第二の類型は大體に於て個人本位の見地に立ち、割合に早くから一般心理學乃至社會心理學そのものの中に於て成長し、從て社會學と混同される事の少なかつたものであつてシュトルテンベルグの所謂 Soziopsychologie に相當する。實例としては本能論的社會心理學、人格形成論的社會心理學を以て代表せしめ得るし又行動論的社會心理學又は實驗的社會心理學も此の類型の中に含め得ると思ふ。以上二類型の中、第一の社會本位的社會心理學(又は社會學的社會心理學とも云ふ)は今日までの所、動もすれば架空的な集合心理現象に就いての抽象的又は概括

的論述に終り易く、従つて第二の類型、即ち個人本位的社會心理學(又は心理學的社會心理學とも云ふ)からは非科學的な誤れる社會心理學と見做され勝ちであつたのである。けれども例へば民族精神や國民心意等の所謂集合心理現象も、之を個人を離れた超越的實在と見ず、個人に依てのみ體現せられ、個人を通してのみ普及又は傳承し得るものだと思はるべき重要問題となる。現在の個人本位的社會心理學から研究せらるべき重要問題となる。現在の個人本位的社會心理學が一方に於て益々實驗的研究を進め、斯して得られる諸原理を更に從來主として社會本位的社會心理學の扱つて居た諸問題の解釋にも立派に適用せしめる事が出来るやうになれば、そこにはじめて社會心理學全體の科學化が遂げられ、社會學とは別個の、然も個人心理學に立脚せる眞の意味の社會心理學が成立するものと思ふ。少くとも現在及び今後の社會心理學はかゝる方向へ進むものでなければならぬ。

- (1) C. A. Ellwood, *An Introduction to Social Psychology*, 1917, p. 4.
- (2) Ellwood, *Sociology in its Psychological Aspects*, 2nd edit., p. 63.
- (3) Ellwood, *The Psychology of Human Society*, 1925, pp. 14—15.

- (+) W. Trotter, *Instincts of the Herd in Peace and War*, 1924. 9th edit., p. 11 f.
- (*) H. L. Stoltenberg, *Sozialpsychologie*, Teil I, *Soziopsychologie*, 1914, Teil II, *Psychosozilogie*, 1922.
- (*) L. von Wiese, *Allgemeine Soziologie*, Teil I, *Beziehungslehre*, 1924. S. 42
L. von Wiese and H. Becker, *Systematic Sociology*, 1932, p. 66.
T. Abel, *Systematic Sociology in Germany*, 1929, p. 94.